



株式会社 豊橋設計

代表取締役

内山 幸司 氏

kouji uchiyama

「危機から見えた機会をとらえて」

主力である機械設計を基に、機械設計に関するソフトウェアの開発やCAD用e-learning製作、さらには教育事業など幅広い事業展開を行っている(株)豊橋設計。

多くの中小企業が、海外展開の必要性を感じつつも様子見をする中で、当所が実施した海外視察ミッションを積極的に活用し、いち早くミャンマーに進出しビジネスを拡大しています。

そこで今回は、株式会社豊橋設計 代表取締役 内山 幸司氏に、海外進出をした狙いや今後の展望についてお話を伺いました。

【企業概要】

株式会社 豊橋設計

〒440-0842 岩屋町岩屋下45-2

TEL：65-4678 (代表)

FAX：65-4680

URL：http://www.toyohashi-s.co.jp

——御社の経歴についてお聞かせ下さい。

内山社長 もともととは設計会社で働いていたのですが、バブル崩壊のあおりで仕事がなくなり、どうせ仕事がないならば自分で新規開拓しようと独立したのが始まりです。取引先に当てはありませんでしたが、懇意にしていたお客様にも独立は伝えず、新規開拓一本から仕事を始めました。もともとメカトロ設計に携わっていたこともあり、独立した時に大手鉄鋼メーカーのロボット開発センターが豊橋に進出すると聞きつけ営業をかけました。運よく仕事をいただく事ができ、そちらとの取引を主として業務をすることになりました。しかし数年後、その取引先が豊橋から撤退することになり大きな危機を迎えます。その時点で同社に売り上げの8割近くを依存していたからです。その時は死に物狂いで駆けずり回りなんとか新規のお客様の開拓に成功しました。

その後は、特定の一社に偏らないよう多くのお客様と取引することを心がけ、現在当社では、部品やプラントの設計にとどまらず機装設計や、半導体設計など多様な業界に属する40社近くのお客様の設計に携わっています。

先進的な管理システム

——設計の品質や納期を守るために、どのような取り組みをされていますか。

内山社長 コントロールセンターにいる経験豊富な管理者が、作業をリアルタイムで確認できる特殊なシステムを用いてきめ細かな指導をしています。昔であれば、製図板に向かっていたので、作業場を歩いて回ればすぐに見当違いの設計を行っているのがわかり、その場で指導が可能でした。しかし現在はコンピュータでの作業で、しかも3次元で設計を行っているため、画面を後ろからちょっと覗き込む程度では容易に判断がつかず、チェックの段階でようやくミスや不具合に気づく例が散見されました。

それを改善するため、現在のシステムでは各作業者の画面が管理者からリアルタイムで確認できるようになっており、場合によっては作業者の端末を遠隔操作することも可能です。音声のやり取りも可能ですので、作業者が見当違いの作業をしていればすぐに指示を出すことができます。当然作業側から質問するのも、わざわざ管理者の席



作業を集中管理するコントロールセンター

に出向く必要がなく無駄な移動時間も発生しません。この新しいシステムを導入してからは、迅速な指導を行えるようになり作業者が設計で悩む時間も短縮され、効率は30%近く改善しました。

当然このシステムは指導だけに用いているわけではなく、管理者が作業内容を俯瞰できる点を活かして、品質管理や進捗管理にも活用しています。この管理体制が、品質の安定と納期の厳守に活かされ、お客様からの信頼に繋がっていると考えています。

ピンチから見えたチャンス

——海外の進出先にミャンマーを選ばれましたが、どのような狙いがあったのですか。

内山社長 優秀な人材の確保が主な目的です。というのも、中小企業共通の悩みですが、日本で募集をかけても希望者があまり集まらず、優秀な人材を採用することが中々できません。人がいなければ新しい仕事を受注することもできませんので、会社にとって死活問題です。

そこで現状を打破するため、少しでも優秀な人材を確保しようと海外へも目を向けることにしました。商工会議所の企画で昨年3月に行われた「経済視察ミッション」等を活用しながら東南アジア全体を調査するなかで、ミャンマー人が日本人と同じように仕事にまじめに取り組んでくれると分かり、ミャンマーに事務所を設け昨年5月から業務を開始しています。

現在は5名の女性社員を迎え、日本で設計した3次元データを分解して、詳細図に落とし込む作業を担当してもらっています。将来的には日本のサポートではなく、一つの独立した支社として仕事をしてもらおうと考えています。既に、ASEAN諸国に進出されているお客様からは、現地内での受発注を優遇する政策に対応するため、ASEAN加盟国であるミャンマーに進出した当社に、仕事を依頼したいというお話が来ています。

人材確保が目的での海外進出でしたが、思わぬ所にお客様のニーズがあることがわかりました。当社としてはミャンマー以外の他国への積極的な展開は考えていませんが、ASEAN諸国からの仕事を請け負う拠点としてもミャンマー支社には期待を寄せています。

——ミャンマーに進出されて、文化や習慣の異なる従業員に対して戸惑う点はありませんか。

内山社長 今のところ事業上での大きな問題点は出ていませんが、文化の違いや言語の違いなどで細かな点においては戸惑う部分もあります。特に言語については、日本語の教育を実施しましたので日常会話であれば問題ありませんが、業務にかかわる意思疎通となると専門用語が伝わらないことがあり、中々難しいと感じています。幸い当社は設計を仕事にしているため図面を通して視覚的にも伝えることができますので、CADという共通言語があることに救われています。



管理システムで日本と連絡をとりあうミャンマーの社員

他にも、仏教画を事務所に掲げることを認めたり、懇親会などではなく僧侶を招いて行う説法会が喜ばれるなどミャンマーという国の文化を深く理解していく必要があると感じています。

多くの日本企業が文化や価値観の違いから優秀な従業員が離職してしまうことに頭を悩ませていると聞きます。当社はコストを重視して、常駐の駐在員ではなく出張ベースで日本人社員を派遣していますが、なるべく現地に赴き彼女たちのケアをしながら、長く働いてもらえる職場を提供できるように試行錯誤を続けていきたいと考えています。

——最後に今後の展望についてお聞かせください。

内山社長 ミャンマー支社については、東南アジアの需要を取り込むという点に加えて、非常に女性の管理職が多い国でもありますので、当社としてもその慣習を参考にして女性を積極的に管理職に登用するミャンマーモデルともいえる人事戦略を構築したいと考えています。それを逆に日本の

女性社員のお手本にして女性の労働力を拡大していきたいと思っています。

事業の観点では、完結型の業務を今後は増やしていきたいと考えています。設計の仕事は分業化が進んでおり、設計会社で構想から完成までを一貫して受注する仕事が減っており、お客様先に出向き細部や専門分野だけを取り扱う技術派遣型の仕事に偏ってきています。専門分野に特化してしまうと視野も狭くなり、技術者本人の成長に繋がっていきません。また、取り引きが特定のお客様に偏っていくことにもなりかねません。



本社内での作業の様子

そこで完結型の業務の受注増を目指すわけですが、お客様からの要望に応えるためには、今まで以上に幅広い技術力が求められます。そのため、自社内で行える業務については、仕事の異動を頻繁に行い、様々な業務に従事させることで設計者としての実力を蓄えてもらうようにしています。そして今後も多くの業務を経験することで培われた総合力を活かして、多様なお客様のご要望に常に対応していける技能集団にしていきたいと考えています。